

# 神戸女学院大学の英語以外の外国語教育について

孟 真理

## はじめに

国際理解の精神を教育の柱の一つとして掲げている神戸女学院大学では、国際共通語としての英語に加えて別の外国語の学びを通じて、言語・文化・価値観の多様性に目を向けることを大切にしている。現在のカリキュラムでは、必修の英語（第1外国語）に加え選択必修の外国語科目（第2外国語）としてドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、朝鮮語の5言語（音楽学科は独仏伊の3言語）を提供している。全学科の学生が1言語を選んで初級2科目（「\*\*語(I)文法」および「\*\*語(I)コミュニケーション」）4単位を、総合文化学科では中級「\*\*語(II)」4単位を加えた計8単位を履修する。また選択必修以外の自由選択科目としてラテン語、ギリシャ語、スペイン語が開講されている。本稿では、このカリキュラムの原型が導入された1997年以前の議論にさかのぼり、英語以外の外国語教育の現在までの動向について、筆者自身の経験も交えて述べてみたい。

## 独仏2言語の時代

筆者が総合文化学科にドイツ語・ドイツ文学の担当教員として着任したのは1995年のことだった。当時、全学科の外国語科目のうち英語については英文学科が管轄し、第2外国語のドイツ語・フランス語の運営は、総合文化学科のドイツ語2名、フランス語2名の専任教員が担っていた。ちなみに独仏語の担当教員は1976年の社会学科改組・総合文化学科開設を機に、英文学科から移籍した。他に自由選択科目として中国語、朝鮮語、ラテン語、ギリシャ語が、また音楽学科声楽専攻学生向けにイタリア語が開講されていた。筆者が最初に担当したのは総合文化学科向けのドイツ語初級クラスだったが、非常勤講師と連

携した週2回の授業で前期に「(I)G」(文法中心)、後期に「(I)R」(講読中心)という密度の濃いプログラムで、コンパクトな時間数でも1年次終了時にはある程度の読解力を身につけることが目指されていた。ネイティブ教員による選択授業も並行履修できたが、どちらかというの中級講読や専門分野の外国語講読の前提となる、専門基礎としての機能をもつプログラムだったといえよう。他学科では総合文化学科に比べると緩やかな進度で、通年で(I)Gと(I)R2科目を並行履修していた。とはいえ文学部英文学科でも、選択必修6単位に加え、独仏上級段階やギリシャ語・ラテン語を専門科目に算入できるなど、やはり専門性を指向する多言語教育が意識されていたことが、カリキュラムから読み取れる。音楽学科声楽専攻ではイタリア語2単位を含む6単位、音楽学科の他専攻と人間科学科では4単位が選択必修であり、主として学科別のクラス編成によって、学科にあわせた外国語教育が行われていた。

### 多言語体制の始動

1990年代は、大学設置基準大綱化(1991年)を受けて多くの大学でカリキュラム改革が進められている時期だった。本学では1993年に家政学部を改組して人間科学部人間科学科が開設されたが、その完成年度をめざして一般教育の改革の議論が進みつつあった。その一環として英語以外の外国語科目に関しては、選択肢の多様化と内容の現代化が検討され、1993年度末には以下の基本方針が出されている。「1)第2外国語として、フランス語、ドイツ語のほかに、中国語、イタリア語、朝鮮語を設定する。2)科目内容を、時代や社会に対応した、実践的で興味深いものにする。3)学生の能力に応じて学習コースを多様化する。4)オラルの能力の充実、発音の授業の拡張をはかる。」<sup>①</sup>

この方針に基づいて1997年度入学者から、第2外国語の選択肢に中国語、朝鮮語、イタリア語(ただし音楽学科はイタリア語のみ、総合文化学科ではイタリア語は1998年度から)が加えられた。英文学科では第2外国語の必修単位数を2単位減らして人間科学科、音楽学科(声楽専攻を除く)と同じ4単位とした。また、多言語化にともないクラス編成は全学科混成となり、総合文化学科の学生も1年次は(I)Gと(I)Rの2科目を通年で学ぶようになった。

全国の大学の動向に目を向けると、第2外国語の多言語化は1980年代の終わりごろからすすんでおり、本学の改革もその流れに乗っている。1998年の全国調査<sup>②</sup>によると、履修者数は多い順に中国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語（全国女子大では中国語、フランス語、ドイツ語、スペイン語）であった。韓国・朝鮮語が選択できる大学はまだ少数であり、イタリア語に至っては「その他の言語」に分類されていた。イタリア語を第2外国語として学べる大学は現在でもさほど多くはなく、音楽学部を擁する本学ならではの特徴となっている。一方スペイン語の導入に関しては本学でも話題にはのぼったものの、当時は自由選択科目としても開設していなかったことから見送られた。スペイン語の開設はかなり後の2009年のことである。

多言語化とあわせて、科目内容の現代化（方針2）が図られたのが、特に初級の「\*\*語（I）R」である。読解力重視を意識させるR(Reading)という科目名称に代えて、「初級応用」というさほど一般的ではない科目名を採用したのも2000年より少し前のことだった。様々な議論があって独仏伊では「初級応用」、中国語は「閲読」、朝鮮語は「会話」と、名称は統一しなかったが、文法クラスで得た知識を土台に、実践的言語活動を通じて「聴く・話す・読む・書く」の4技能を習得し、また異文化理解を促進するという目標は、どの言語においても共通していた。この科目コンセプトの基本は現在まで保たれている。新たに第2外国語に加わった伊中朝の3言語ではこの科目を原則ネイティブスピーカーの非常勤講師が担当し、独仏でもネイティブ講師の担当を徐々に増やしていった。この科目は2024年度から「\*\*語（I）コミュニケーション」と改称し、言語間の統一と科目コンセプトのさらなる明確化を図った。また中級（総合文化学科で2科目選択必修、他学科は自由選択）に関しては、独仏伊においては内容・目的の異なる複数科目から選択でき、中国語・朝鮮語では文法・講読科目とネイティブ教員担当科目の双方にまたがって学ぶシステムとなっている。

方針3、4に関しては、A Vライブラリの整備があり、語学自習教材の設置や視聴覚学習用ブースが確保された。ごく小さなスペースではあるが、英語教材とあわせ、その他の外国語の音声教材や検定試験用教材も学生が自由に使えるようになっている。また海外語学研修に関しても、1997年から英語圏とあわ

せフランス語海外研修（隔年開講）が単位化された。この研修はもとはフランス語担当の教員が正課外の活動として実施していたもので、その実績を踏まえ大学の正規プログラムとして認められるようになった。2000年代以降は、中国や韓国における語学研修も主に国際交流センター主導で順次開始され、単位認定されている。ドイツ語やイタリア語の研修プログラムは、筆者自身の力不足もあって残念ながら現在まで開設できていない。

### その他外国語委員会の役割

第2外国語の多言語化に伴って浮上したのが、科目運営の問題である。提供科目の言語や言語教育に精通した専任教員が必ずしもいない状態が、選択必修科目の運営体制として適切なのか、当初から言語担当教員の間では不安視されていた。さいわい 1997 年度に総合文化学科に東洋史分野では中国史、西洋史分野ではイタリア史をそれぞれ専門とする教員が着任し、この2名が中国語・イタリア語の第2外国語としての立ち上げにあたって大きな役割を果たした。朝鮮語に関しては、2024年に韓国語を母語とする専任教員が着任するまで、長らくこの言語に通じた教員が不在であった。また学科として「外国語教育担当」を前提とした人事枠を持たないため、専任教員の退職によってある言語の担当者が不在となる事態が、朝鮮語以外でもしばしば生じている。

こうした不安定な体制を補うため 1998 年、総合文化学科内に「第2外国語委員会」（のちに「その他外国語委員会」）を立ち上げ、英語以外の外国語科目に関する事項を共有する体制が作られて、現在に至っている。言語教育科目を担当しない教員も含め、文学、歴史学、哲学、国際関係論、社会学、美学・芸術学、経済学、日本語教育学などの分野の数名が分担して、各言語の責任者（コーディネーター）を務めてきた。各言語責任者は担当言語の非常勤講師と密に連絡を取りながら科目運営にあたり、また委員会として外国語科目全般にわたる諸問題に取り組んできた。外国語教育の質保証のために委員会が行ってきた事項として、例えば科目内容・到達目標の調整、成績評価のガイドライン検討、第2外国語授業に関する学生向けアンケート実施などがある。フランス語やドイツ語では、文法クラスの共通教科書・推奨教科書の設定を試みた時期もあった。と

もあれ開講クラスの大部分（言語によっては全クラス）を非常勤講師に頼る本学の体制には困難も多く、教育水準の維持にあたってはむしろ多くのベテラン非常勤講師の方々の献身によるところが多い。

自由選択の外国語（第3外国語）も委員会が立案しており、隔年開講だったラテン語・ギリシャ語の毎年開講への変更や、スペイン語の新規開講にこぎ着けた。その一方で、自由選択科目（第3外国語や各言語上級科目等）においては、履修者不足のため開講できなくなる事例がしばしば生じている。社会における英語重視の風潮のなかで、英語以外の外国語を学ぶ意義や魅力をいかに学生にむけて発信していくか、またプログラムやシステムをどのように時代に合ったものとしていくかが、委員会として今後も継続的にとりくむべき課題である。

### 東アジア言語への関心

学生の第2外国語選択の動向と開講クラス数の推移を、簡単に見ておきたい。学科が指定した言語の中から何を選択するかは、学生が自由に選ぶことができ、人数制限は設けていない。そのため、その他外国語委員会では、予測される履修者数に応じてクラス数を毎年調整している。

多言語化の当初から、中国語に履修者が集まることは想定されていた。一方イタリア語や朝鮮語については手探りで、全学で1クラスずつの設定からはじまった。別表には多言語の提供体制が整った2000年度以降の開講クラス数（選択必修に算入される科目のみ）の大まかな推移を示している<sup>③</sup>。

クラス数推移（選択必修単位となる科目のみ抽出）						
年度	2000	2005	2010	2015	2020	2025
ドイツ語	17	14	15	16	13	13
フランス語	24	22	17	16	14	15
イタリア語	15	16	16	17	16	15
中国語	26	26	24	22	26	26
朝鮮語	4	14	17	19	21	22

この表からも見て取れるように、中国語は当初から履修者の最も多い言語と

なった。なお中国語履修者数は、日中関係が悪化した時期には一時的に減少するなど、他の言語にくらべると政治・社会情勢に影響される側面があるようだ。選択動機が実用性や将来のキャリアへの期待と結びついていることがうかがわれる。朝鮮語履修者は、当初は少なかったが 2000 年代後半から急増し、現在もなお増加傾向にある。2000 年代の第 1 次・第 2 次韓流ブームを経て、今や韓国語・韓国文化がごく身近なものとなっていること、高等学校でも韓国語を学ぶ機会が増えてきたことなどが、要因としてあげられる。こちらは主として文化的関心と連動しているようだ。イタリア語は開設当時から一定の関心を集めており、大きな変化は見られない。減少傾向にあるフランス語、ドイツ語履修者と同程度の人数となっており、ヨーロッパ言語との接点も「親しみやすさ」が動機づけのひとつになっていることがうかがわれる。むろん学生の立場からは、習得のしやすさ（難易度）も選択基準として大きいだろう。

とりわけ歴史的にも地理的にも近い東アジアの言語や文化への関心の高まりは、自然なことといえる。また「実用性」を使用機会と捉えるならば、国内でも日常的に接点のある言語は、学習のモチベーションを維持しやすい。今後もこの傾向はおそらく大きくは変わらないだろう。

### 総合文化学科における多言語教育

総合文化学科では、学科設立当初から複数言語の習得を重視し、第 2 外国語については他学科より多い 8 単位を 2 年間で履修する教育課程を編成している。また専門科目においても外国語を重視してきた歴史がある。1999 年までは、2・3 年次で語学ゼミ（Ⅰ）（Ⅱ）を必修とし、英語、第 2 外国語または古文による専門分野の原典講読を全員に課していた。この体制は 2000 年から 2003 年のゼミ改革の際に改められ、「語学ゼミ（Ⅰ）」はアカデミックな日本語運用能力を育てる「文献ゼミ」に変更、また「語学ゼミ（Ⅱ）」は廃止された。これにより学科の専門科目において外国語は必須ではなくなったが、代わって全学向け外国語上級科目「\*\*語（Ⅲ）」を、専門科目（メジャー科目）「外国語特殊研究」（のちに「外国語セミナー」）に転換した。科目内容も外国語運用能力に加えて現代社会や言語文化の理解によりシフトしたものとなり、3 年次以降も外

国語の学びを深めたい学生のさまざまなニーズ（語学スキル、地域文化への関心、専門分野の必要、留学や進学準備等）に応えている。このほかにも学科カリキュラムの中で、アイヌ語や新約聖書ギリシャ語など言語を学ぶ科目が提供されている。

人文・社会科学の諸分野に多角的視点からアプローチすることを主眼とする総合文化学科の教育課程にとって、1・2年次で英語に加えてもう一つ別の言語体系をある程度集中的に学ぶことは、実践的な運用能力の養成にとどまらない重要な意味を持っている。日本語と英語に加え第3の極を獲得することで、自文化と異文化という二項対立から解き放たれ、言語がかたちづくる文化それぞれの独自性や複雑さに対する理解と敬意をもつこと、ひるがえって日本語によって構築されている自文化を客観的に見るまなざしを獲得することが、求められている。

こうした要請はむろん総合文化学科に限定されるものではなく、神戸女学院大学の掲げるリベラルアーツの精神ともかさなりあう。全学科の学生にとって第2外国語の学びが、多様な他者との対話の精神をはぐくむ意義深い場であり続けることを期待して、本稿を閉じたい。

#### 註

- ① 1994年3月14日教授会資料「カリキュラム改革案」
- ② 「全国事務系大学生・非英語外国語（第二外国語）選択状況調査結果報告書」平成10年12月 株式会社毎日コミュニケーションズ
- ③ 言語によって1クラスあたりの人数が異なるため、この表は履修者数を正確に反映したものではない。提供体制等の事情から、ヨーロッパ言語よりも東アジア言語の方がクラスサイズは大きめである。

（総合文化学科教授）